

2022年10月29日

厚生労働省 労働者協同組合法 周知フォーラム <関西ブロック>

■ 事例紹介「労働者協同組合法をどう活用するか」

市民が育て、地域で循環する

コミュニティ経済づくりと、ワーカーズコープの可能性

特定非営利活動法人 暮らしづくりネットワーク北芝

中村 雄介

(1)北芝という地域とその変遷

(2)「つばやきひろい」からまちづくりへ

(3)2000年代以降のまちづくり活動

- ・食を通じた場づくり
- ・教育の取り組み
- ・「人が集う場づくり」
- ・地域通貨の取り組み

(4)北芝での困窮者・若者支援

大事にしたいこと

- 言葉にならない困りごとを共有することから
- 地域を中心に支援と被支援を超えていく 協同実践
- 「参加の支援」でまち全体が元気に！
- 就労や自立だけではない“新たな暮らし方”の模索と実践
- 生活困窮者を受け止めるまちの背景 「おやおや探知機」
- 「社会／地域が若者の生きづらさをつくった」
⇒「生きづらさを抱えた若者が社会／地域をつくる」

(5)最後に

- ・「つながり」をつくり、困難を抱えた人たちを包摂する地域・社会づくり
- ・労働者協同組合の可能性

はじめに

大阪の箕面市から参りました中村雄介と申します。所属は「NPO法人暮らしづくりネットワーク北芝」で、まちづくりや部落解放運動、合同会社の取組みなど、中学校区ぐらいのエリアで活動しています。私たちの地域では、様々な活動主体をまとめる「コミュニティ・マネジメント・オーガナイズーション(CMO)」という形でまちづくりを進めています。個人的には全ての組織が設立される時期に関わっていた訳ではありませんが、ひとつの団体だけでなく地域に多様な団体が存在し、そのネットワークの中で活動してゆくことが必要だと思っています。

本日お伝えしたいことは、前半は北芝のまちづくりの実践、後半は困窮者支援や若者支援から考える地域づくりについて、とくに私たちが力を入れている若者支援についての取り組みです。この取り組みは、内閣府がモデル事業としてはじめたパーソナルサポートサービスや現在の生活困窮者自立支援事業とセットでNPOの独自事業として実践しています。

またこうした実践の成果物として「若者の生きづらさを小さな声で絶叫するマガジン」という冊子を作成し、今日の資料として配布しております。若者たちの声に出しにくい生きづらさを、どうか社会に対して発信していきたいという思いが詰まった当事者研究の成果物です。メンバーと一緒に若者の実態や生きづらさを発信し、安心して暮らし続けることができる地域づくりにつないでいきたいと思っております。

市民が育て、地域で循環する

コミュニティ経済への挑戦

生きづらさを解消し、豊かな自立と

就労に結ぶ仕事づくり・地域づくり



中村 雄介

(特定非営利活動法人 暮らしづくりネットワーク北芝)

1 北芝(きたしば)について

まず、箕面市の紹介ですが、人口は約13万人で、関西では滝と猿、紅葉の観光スポットとして有名です。最近では箕面ビールがお土産として人気があります。ぜひ一度、箕面に遊びに来ていただけたらと思います。

私たちが暮らす地域は、萱野という地域です。小学校も萱野小学校といます。この中で北芝エリアとは、まちの東西を横断する国道171号線と南北を結ぶ新御堂筋という2つの道が交差する辺りにあります。約250世帯が住む小さなコミュ

ニティで、広さは小学校区の3分の1程度で、徒歩で行き来できる範囲にあります。ここには地域課題として、高齢化や生活困窮者層の増加があり、生きづらさを抱えた地域だと言えます。

また、歴史的には被差別部落の地域として差別を無くすことを目的に解放運動が行われてきました。この運動は、NPOの活動を中心としたまちづくりにも引き継がれ、現在も続いています。そのため地域の人たちは誇りを持って自分たちのまちを「北芝」と呼んでいます。部落問題に関しては、いまだに被差別部落地域に対する差別が社会に根深く存在してい

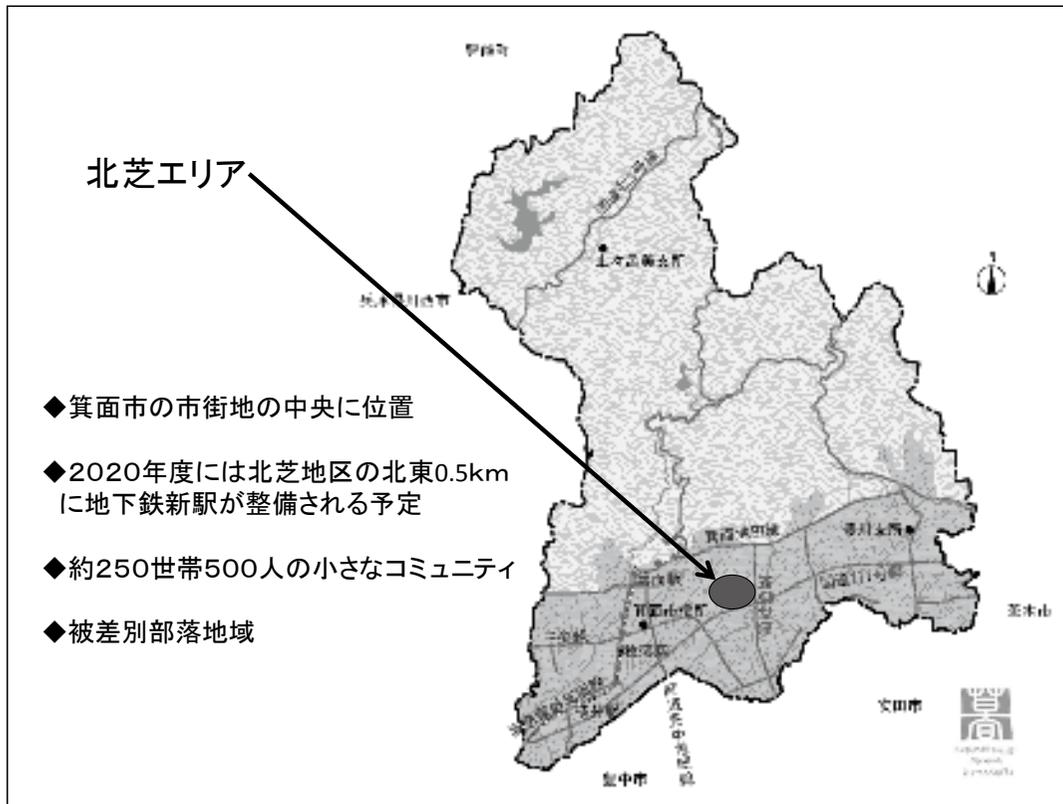


図1 北芝エリア



図2 北芝エリア

るため、いまでも私たちのまちづくりの根底に部落差別のない社会の実現というテーマがあります。単なるハード面のまちづくりだけではなく、こうした地域の課題をベースに「だれもが安全で安心して暮らすことのできるまちづくり」が進められています。

2 北芝のまちづくりの変遷

歴史的に北芝は、被差別と貧困のまちとして周りからみられてきました。そんな中、1969年に同和対策特別措置法が成立し、国策として同和対策がはじまるタ

イミングで北芝でも部落解放運動が本格的にスタートします。

同和対策事業は、居住権の問題として道幅が狭くて消防車や救急車が入ることが難しく、共同トイレ・風呂しかない劣悪な不良住宅で生活する人達に対して、公営住宅を確保することを行政とともに進めることから始まりました。まちづくりの歴史はソフト面(職、教育の保障等)とハード整備を中心とする運動によってすすめられてきましたが、それまでの貧困の連鎖を絶ち切ることにはいたらず、行政にたいしての制度や保障の要求をしていく運動の限界が見えてきました。

まちづくりの変遷 1	
<p>1969年～94年ハード整備</p> <ul style="list-style-type: none"> 被差別と貧困のまち そこでも求められたのは環境改善 国策としてのキャッチアップ型まちづくり(特別措置法) 不良住宅除却、市営住宅建設 道路・上下水道・公園整備 生活福祉拠点の隣保館 保育所・青少年会館・青少年体育館・青少年グラウンド等 	<p>1969年～94年ソフト整備</p> <p>北芝支部による住民要求運動の組織化 → 行政交渉</p> <p>被差別と貧困課題解決のため一般施策に上積みする特別対策</p> <ul style="list-style-type: none"> 教育奨学金の支給 市営住宅 低家賃 皆保育と保育料の減免 生個人給付 現物・現金給付

図3 まちづくりの変遷1

まちづくりの変遷 2	
<p>85年～ 北芝のまちを見直そう</p> <ul style="list-style-type: none"> コンクリート・アスファルト・金網の街から「誰もが安心して生活できる空間」へ 85年「まちづくり行動計画」 教育実態調査結果(89年)に愕然・反省 10年以上も実施してきた学力向上活動の成果みられず、むしろ自尊心の低さが顕著 <p style="text-align: center;">↓</p> <p>低学力と自尊心の低さをもたらしている底流に、支部への依存、行政への依存と甘え</p>	<p>95年～ 新たな活動スタイルの模索</p> <ul style="list-style-type: none"> 行政闘争主導型・対症療法的手法の限界を反省 自己選択・自己責任・自己実現 → 自立層は個人給付を自主返上 新たな福祉施策の展開。 既存の特別福祉施策の破綻。 個人給付から雇用へ 貧困層には地域独自共済制度で支援

図4 まちづくりの変遷2

このため、北芝の運動のリーダー達は、行政に対する要求型の運動についての持続性と、逆に地域住民の力を奪っていないかという視点で議論を重ね、結果としてこれまでの運動の方向を大きく転換していくことになります。

一例として、高齢者を対象に敬老祝い金という形で個人給付されていたお金を返上し、新たな取り組みとして仕事づく

りをはじめたことがあります。これは、高齢者に対して継続的に補助が続くことが難しいことを見越し、自分達で仕事をつくることによって生活の糧を得ることができるようになっていくためのものでした。このように、給付などに依存することから自分たちの暮らしを自分たちでつくっていく“住民自治”の方向へ運動を転換させていきます。

また“自己完結型”からまちづくりの運動として、自分たちの地域だけがよくなれば良いという考え方ではなく周辺のまちも含めて住みやすいまちをつかっていくことを大切にした“周辺参加型のまちづくり”への転換でもありました。部落地域の周辺に残りやすい差別を、協働のまちづくりを通して共に乗り越えていきたいという願いも込められていました。

3 「つぶやきひろい」からまちづくり

こうした運動の転換のなかで取り入れられた手法が、ボトムアップ方式としての「つぶやきひろい」です。それまでは運動のリーダーたちが地域にある課題をすくい上げ、行政と協議しながら改善を進めていましたが、あらためて地域の人

達のつぶやきを拾い、生活課題とは何なのかということを含んで考えていく必要に気付いたのです。私自身、今の仕事も「つぶやきひろい」をかたちにしていくことだと思っています。

この「つぶやきひろい」は、ワークショップ方式で進められていきました。様々な世代の地域住民が集まり、自分の住む団地や地域の生活の課題を出し合い、少しずつ自分たちのまちの課題やアイデアが集まり、その内のいくつかが具体的な事業として形になりました。

例えば、高齢者になった時、孤食の不安があるので配食サービスが欲しいという「つぶやき」から配食サービスの仕組みが生まれました。また、地域の高齢者が働くことで生きがいを持ち、社会や地域に貢献しながら少しのおこづかいを稼

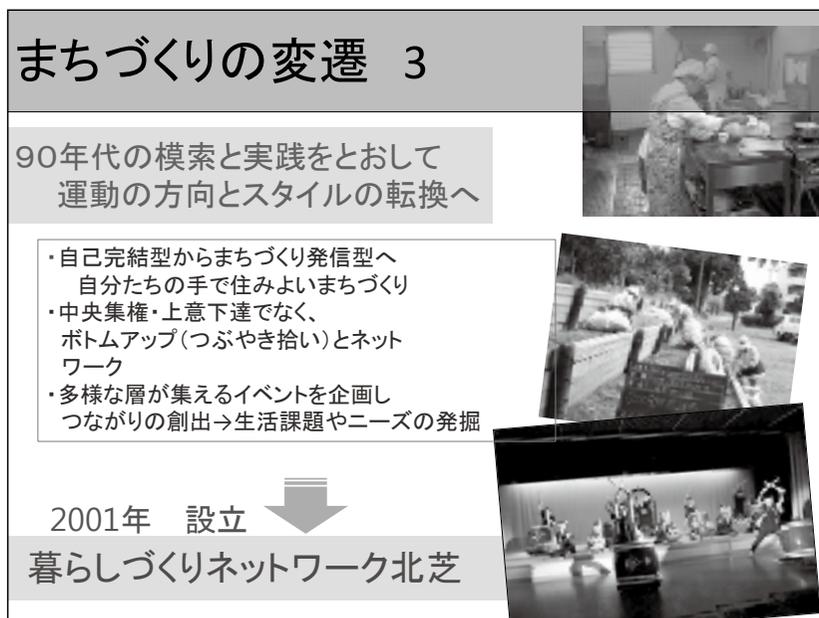


図5 まちづくりの変遷3

ぐことができる仕組みとして「まかさん会」をつくり、公園清掃や道路清掃の仕事をこなしていきます。さらに、自己肯定感が低い子ども達の課題について、勉強ができなくても特技を持たせたいという青年の「つぶやき」から太鼓のチームを設立させました。太鼓の練習や発表を通して子どもや青年たちは切磋琢磨しながら、技術の向上に合わせて自己肯定感を高める取り組みになりました。

さらに、地域を知ってもらうために多様な層が集うことができる様々なイベントも企画していきます。イベントでは人権問題や部落問題という固い切り口だけではなく、環境問題や食の問題など身近なテーマから始めることで、人が集う場をつくり、部落内外の人達の出会ひのきっかけにしています。

4 NPO法人 暮らしづくり ネットワーク北芝

こうした活動を通して、2001年に「NPO法人暮らしづくりネットワーク北芝」が設立します。法人のミッションは「誰もが安心して暮らせるまちづくり」をテーマとして、人と人、人と地域をつなぐネットワークとして機能、地域の課題解決のために行動する個人やグループの支援を中心に多様な事業を展開するといった中間支援が中心です。そのため元々は法人自体が事業を大きく展開するという想定はしていませんでしたが、ここ数年は生活困窮者支援事業などの事業の展開がさ

れてきています。法人の取組みの対象は地域住民すべてであり、赤ちゃんや妊婦さん、子どもから高齢者までのすべての人たちで、様々な活動を通して、一人ひとりがその人らしく、安心してくらせる地域づくりを模索してきました。

北芝地域には複数の活動拠点があります。まず、大きな拠点の一つに「らいとぴあ21」(萱野中央人権文化センター)という施設があります。社会福祉法に基づいた隣保館で一般的な公民館とは違い、近隣地域の生活や福祉の水準を向上させることが目的と明記されており、総合生活相談、人権啓発などの機能を果たして来ました。パーソナルサポートサービスや生活困窮自立支援事業が始まる前からワンストップの相談サービスが地域の中に存在していたのはこのためです。

また、高齢者向けの「いこいの家」という隣保館の施設も運営しています。高齢者の居場所がテーマで、介護予防事業・講座の開催、福祉ボランティアや地域共済制度の事務局になっています。さらに、「イーチ合同会社」というまちづくり合同会社があります。これは、事業体としてNPOが委託だけに頼るのではなく、営利事業体をもつことで、自前で仕事や雇用を生み出していくことを目的に設立されました。

さらに地域の拠点の中心として「芝樂」広場があります。ここでは広場に加え中間支援の一環として、2つのコンテナをチャレンジショップとして設置していま

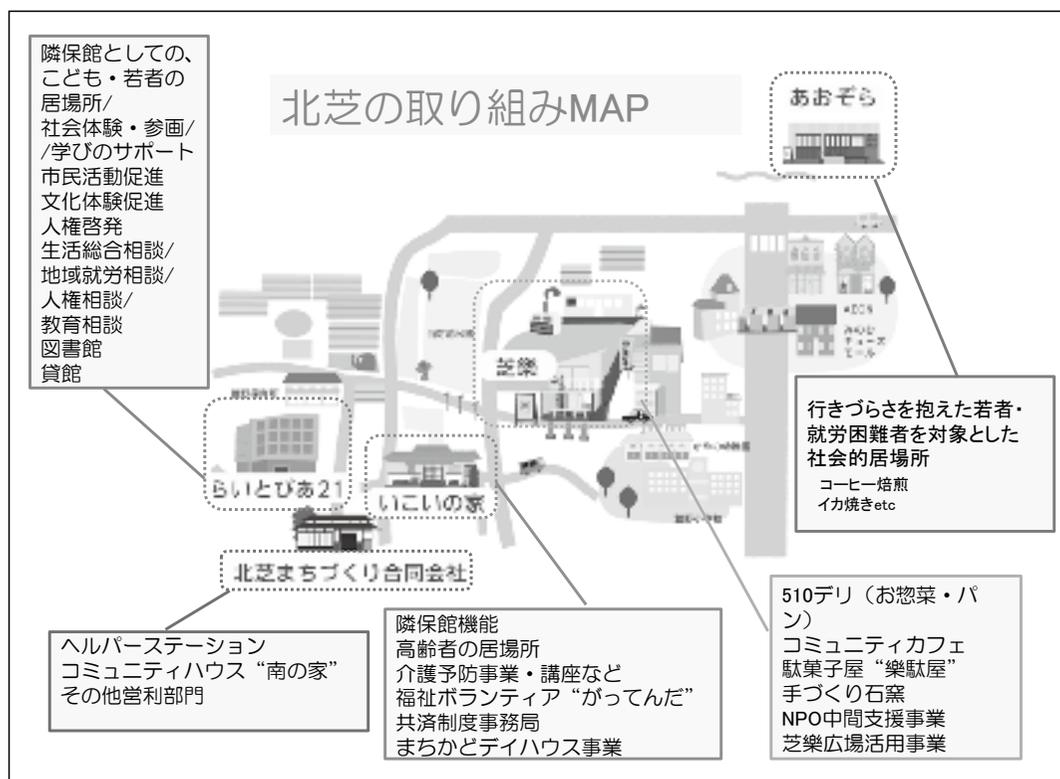


図6 北芝の取り組みマップ

す。コンペなどを通して地域住民によるモーニング喫茶やマッサージ屋や駄菓子屋などが生まれ、多様な人達の参加の拠点になっています

1) “食”を通した場づくり

北芝の食をささえる取組みの1つが「510deli(ごっとうデリ)」です。この「510」は「ごっとう」という「ごちそう」がなまった地域の言葉です。ここでは、お惣菜や弁当、焼きたてパンが販売されています。隣接する510キッチンコミュニティカフェとしての機能もあり、地域の高齢者がモーニングを、若者たちがカフェや居

酒屋を開催していたこともあります。また、ご飯を食べながら地域の子どもから高齢者までが集い、“地域の食”をテーマに語り合う地域ごはん会議を行なったりもします。他にも、普段は高齢者の居場所に集まりにくい人を対象に地域の若者によるナイトデイサービスもボランティア企画として開催しました。職員や地域の青年達がスーツを着て、中高年、高齢者にお酒をつぎおもてなしをします。こうして福祉サービスの対象ではない人たちや生きづらさを抱えた若者が一緒に交流しながら飲み食いすることのできる場が地域にたくさん生まれています。

2) 教育の取組み

私は、働きだして5年ぐらいは教育の現場で子ども達に関わる仕事をしていましたので、教育に関する取組みに力を入れてきました。「ピースサイクリング」といって、8月6日の原爆の日のセレモニーを目指して、大阪から広島まで400kmの距離を自転車子ども達と旅をする活動を企画したこともあります。参加してくる子どもたちの中には、生活リズムが朝夜で逆転している子どももいましたが、朝から晩まで自転車に乗って、晩ご飯をみんなで作って食べて、一緒に寝るという一連のサイクルで生活リズムを取り戻したメンバーもいました。一週間の旅の途中では、疲れて寝ながら自転車を漕ぎ、田んぼに落ちたり、健康を崩したりとトラブルも起きますが、子ども達は共同生活を通して生活力や自己肯定感を育んでいきます。また、中高生100人のライブイベントや、子ども達の夢を叶える企画として、気球を飛ばすイベントを開催したこともあります。貧困の連鎖など非常に困難な環境下でマイナスの選択をしてしまいがちな子ども達が、プラスの選択肢を持てるように居場所・社会体験・学力サポートをテーマに様々なプログラムを企画しています。

3) 「場づくり」

もう一つ力を入れているのがあらゆる世代の人が集うことのできる場を地域につくる「場づくり」です。ここでの考え

方は、自分達の拠点はなるべく手づくりでつくるというシンプルなものです。

芝樂広場のウッドデッキは当時活動に参加していた若者とスタッフが手づくりで作製しました。またコンテナの壁塗りも子どもや若者たちと行いました。彼らは結婚して出産を経験し、駄菓子屋に子どもを連れて来たときに自分が塗った壁や場所を覚えていたりします。そういう意味で手づくり感やプロセスに関わったことによる所属感を大事にしています。

また、一緒に働いている職員の結婚式を地域のおばちゃんと手づくりで企画し、人生の節目の場を地域のみinnで祝いました。さらに、地域の祭りについても手づくりで行っています。毎年夏に開催する火祭りでは、手づくりのたいまつを子どもたちが持ち、青年は道路いっぱいの長さの竹の端に麦わら縛った“むぎわら”に火をつけて走ります。このような祭りという場を通して世代間の交流が生まれています。

4) 地域通貨のとりくみ

北芝のまちづくりの中心に地域通貨を活用した共済制度があります。わたしたちの地域の公営団地で高齢者の孤独死が問題になった時期がありました。そのため、この課題を解消するために共済サービスを地域通貨(地域みまもり券)の取り組みをはじめました。毎月この“みまもり券”という500円分のサービス券をスタッフが配布することで見守りや御用聞

きをします。高齢者はこの券を使って、電球交換、病院までの送迎、買い物代行などのサービスを利用することができます。

また、「まーぶ」という地域通貨もあります。名前の由来は、「遊ぶ」と「学ぶ」が混ぜ合わせたところからきています。子ども達の選択肢は学校の教育だけで構成されているわけではなく、広い意味での学びや遊びから構成されています。地域で獲得する社会体験やボランティア体験を通して自己肯定感を積み上げ、豊かな選択肢を獲得してほしいという発想からこの取組みが生まれました。これまでの地域通貨が地域の中での流通を通した人の交流を目的にしていたものを、子どもの貧困の連鎖を断ち切ることを目的として教育通貨として実験していることに大きな意味があると思います。

また、この活動に多くの企業が協力してくれています。例えば、近所にある東急不動産SCマネジメント株式会社のショッピングモールの8割近い店舗で「まーぶ」の利用が可能になっています。そのため、子どもたちは自分たちで稼いだ「まーぶ」で映画を見たり、カフェでコーヒーをのんだり、ユニクロで買いものをしたりできます。

実は、ユニクロの店員から「若者が数千まーぶ持ってきて服を買いたいと言ってきているけどこれは本物か？」と事務局に問い合わせが入ったこともあります。彼らは地域の畑や苗づくり手伝うこ

とによってまーぶを稼ぎ、服を買いに行った訳ですが、そういった意味でアルバイト経験のないひきこもり当事者の仕事体験や買い物体験の一助になっている側面もあります。

5 北芝地域総会

CMO（部落解放北芝まちづくり機構）全体で地域住民も含めてまちづくりについて語り合い、分かち合う場としての「北芝地域総会」を毎年1回開催しています。現在は、1)「ささえあい」、2)「はたらく」、3)「たべる」という3つのテーマに重点をおいています。また地域総会は会社やNPOなどがどのような活動を計画しているか以外にも、地域に複数あるボランティア団体やコミュニティがどのような活動を展開するかの発表の場にもなっています。

1) 「ささえあい」

まず、「ささえあい」ですが、言葉としては地域ですと大切にされてきたものですが、実際に地域の中で推進するとなると非常に難しいものです。運動体が行政に対して要求行動をおこなう中で、本来であれば、自分達で支え合っていく場面においても制度や行政に依存していた時代もありました。今は、状況が変わりましたが、NPOの取組みが大きくなればなるほど、マンパワーを含む組織の力が強くなり地域の人達によるささえあ

いの機会を減らしているのではないかと
いう懸念もあります。このため、あらた
めて自分達ができる事、できない事を
しっかり考え合っていくことの必要性を
感じています。

こうした「ささえあい」を考えるキー
ワードとして「地域共生社会」がありま
す。この言葉は、厚労省の地域共生社会
実現本部においても地域の住民が役割を
持ちながら活動できる社会の実現という
文脈で触れられています。また、北海道
の浦河べてるの家の向谷地さんは「最も
弱くだらしのない人を中心にした活動が地
域に豊かさをもたらした」と述べていま
した。この最も「だらしのない人」を中
心として活動が広がったということは非常
に興味深い言葉だと思えます。

こうしたキーワードに表れているによ
うに、地域を豊かにしていくという方向
性を考えた場合、「だらしのない」という
か弱い地域、生きづらさを抱えた地域
の中で、実際にさまざまな困窮を抱えて
いる人たちと、手を取り合い、できるこ
とをシェアしながら、「ささえあい」のま
ちを実現していくことが大切だと感じて
います。

2) 「はたらく」

次に、重点をおいているテーマが「は
たらく」です。やはり、地域づくりにお
いて関わる全ての人にしっかり役割があ
ることや地域のしごとづくりに住民を含
む多様な人が参加することが大切だと思

います。また企業で働くことだけに価値
を置くのではなく、小さな仕事をかけ合
わせる働き方や、福祉制度と短時間就労
をセットにした生活など多様なライフモ
デルを提案することにも意味があると思
います。合同会社や若者たちとのしごと
作りを通して若者から高齢者まであらゆる
世代の人が活躍できる場面をつくり、
そういった仕組みをわかりやすく発信す
ることが大切だとも思っています。

3) 「たべる」

もう一つ、地域をつなぐツールとして
共通するテーマは「たべる」です。孤立
しがちなおじいちゃん、おばあちゃん
でも、引きこもっている若者でも、全て
の人が“食”に関係しています。こうした
意味で、高齢者や若者同士など同じ属性
同士が食を共有する場面や、世代や属性
がばらばらの地域の人達が一同に会して
食卓を囲む取組みとして“樂ごはん”や
朝市を開催しています。

6 北芝における困窮者支援と 若者支援

ここからは、私たちが取組んでいる困
窮者支援と若者支援についてお伝えしま
す。日々の暮らしの中にさまざまな相談
があり、今の制度だけではなかなか解決で
きない困難を抱えた人たちが私たちの地
域にもいます。

まず、私たちが若者支援を実践する中
で大切にしていることは、生活の安定と

居場所の獲得です。やはり、生活のベースとして安心できる関係性や場の獲得が最初のステップとして必要と考えています。これは、若者だけではなく高齢者も子どもに関しても同じことであると思います。

次に、社会体験としていろんな人やモノと出会い、さまざまな活動に主体的に参加・参画することによって役割を得るプロセスが大切です。このプロセスを“地域をくぐる”という言葉で表現することもあります。こうした居場所や安心の獲得から、様々な体験を獲得し自立につながっていくと考えています。

「自立」という言葉にも議論がありますが、私たちは繋がりを通した自己決定、自己選択、一歩踏み出して挑戦してみることなどがその要素としてあるのではないかと考えています。

この一連のプロセスの中で得ていくものとして、安心・承認・自己肯定感・自己有用感・職業観・経験・多様性(価値観、ライフスタイル)等があると思います。こういうものが少しずつ困窮状態にある若者達のエネルギーとして一人ひとりの中に蓄積される中で自立につながっていくのではないかと考えています。

1) 生活・居場所サポート① 居住支援

まず、生活・居場所のサポートに関しては、生活拠点の喪失など困難な状況にある若者を対象に助成金などを活用しコミュニティハウスを使った居住支援をお

こなっています。

単純に居住支援といっても制度的に既にあるものとは性質が異なります。長ければ半年間くらい若者の生活を支えたこともあります。シェルターなどとの相違点は、担当スタッフとの閉じた関係性だけでなく、コミュニティハウスや地域の取組みを通して地域の様々な住民と関わりながら生活することです。コミュニティハウスの隣には合同会社があるので、日々色んな人達が入り出りをしています。よって、情報を全部閉鎖せずにサポートを受けている人のことを必要に応じて地域の人に共有することもあります。そうすると、「自分も若い頃は苦労したので、そういう状況の若者を支えたい。休みの日一緒に出掛けよう」、「飯でも食いにおいで」と言ってくれる地域の人が出てきます。このように、全ての情報を閉ざすのではなく、若者たちの実態を知ってもらうことによって地域とのつながりが生まれていきます。地域や家庭から排除されてきた若者たちが、もう一度、地域や家族観と出会い直す場面としてコミュニティハウスの活用など居住のサポートがあります。

2) 生活・居場所サポート② 社会的居場所 あおぞら

もう一つは、居場所の実践として「社会的居場所 あおぞら」の運営があります。就労支援をゴールの1つに設定しても、長い間、家の中で引きこもっていた

人達がいきなりハローワーク等に行くことはできません。そのため、まずは一人で外出し、出かけた先には同じような境遇を経験した人と出会うことのできる場が必要です。若者の中には、こうした居場所で、数ヶ月かけて他者と話せるようになる人もいます。そういった場の獲得や、仲間との出会を通して若者たちが力を取り戻し、ハローワークの利用など、次のステージに進むことがあります

よって、この社会的居場所の目的はいわゆる就労支援だけではありません。そういう意味で、料理活動、アート作品の制作や展示など若者のニーズに応える自己表現の場として活用して来ました。しかし、今年の3月に運営資金の課題などから、居場所に終止符を打つのも一つの体験ということで運営を終了しました。

この取り組みの一環で、自己資金が足りないときに2つ下の元引きこもりの後輩と一緒に母校である中学校に行き社会的居場所の継続のための寄付をお願いしました。そこで彼は「自分は、中学時代非常に生きづらかった。先生達はケアしてくれたけど自分の本音は、もっと発達障害に関して理解して欲しかった。自分は今、『あおぞら』という場所で色々な仲間を見つけ、次のステップを見つける事が出来た。今いる生徒さん達に同じ思いはして欲しくない。そういう人達のためにもっと発達障がいや居場所の意味を考えて欲しい」と訴えたのです。この言葉は大きな反響を生み出し、5分間で

3万円もの寄付を集めることができました。支援者である私たちだけが取り組みや課題を伝えても継続の協力や資金は集まらなかったように思います。当事者である彼が自分の素朴な言葉と自分のペースで話したことにより賛同を得たものでした。

3) 社会体験① 地域通貨「まーぶ」/ 共済サービス

こうした生活・居場所のサポートを通して安心を見出した後、次に地域活動など、社会体験の参加が重要です。例えば、子ども達とゴミ拾いのボランティアをしたり、地域の高齢者にマッサージをしたり、生活支援の一環で家の電球を交換したりすることで「まーぶ」や見守り券などの地域通貨を稼ぐことができます。

こうした取り組みを通して、生きづらさを抱えて支援される側だった若者たちが、地域の貴重な担い手になっていくことがあります。具体的には、子ども事業のサポーター(ボランティア)活動、地域のお祭りや朝市の手伝い、和太鼓など伝統文化の継承、共済サービスなどの担い手として若者や困窮者が活躍するのです。

この支援と被支援の関係性を壊し、対等に地域の一担い手として成長していくことが困窮者支援でも大きな意味をもっているものだと思っています

4) 社会体験② 生み出す・創り出す就労体験

社会体験の一環の中間的就労の場として、少しずつ企業から仕事を切り出して貰うことも必要ですが、私たちは地域で多様な人が参加することができる仕事をつくりだしています。

具体的には、引っ越し作業をやっていきます。わたしたちは大阪市内の若者支援のNPOと協同し、「ニート引っ越しセンター」と名乗っています。コンセプトは「安い、丁寧、でも遅い」です。それでも一般的な業者ではなく若者達に活躍の場を提供してくれる依頼主が結構います。最近では、大学の先生の退職に合わせて研究室の引っ越しの依頼をお受けしました。大手の大学の研究室に、やんちゃ系の子や引きこもりの若者などなど10人くらいでお邪魔し、引っ越し作業をしました。作業は、段ボール100箱位の本をアパートに運ぶ作業で、体力はなくて口ばかりの若者もいれば、寡黙にずっと運び続ける若者もいて、こういった若者の実情を地域福祉の第一人者である先生に感じてもらいながら仕事をこなしました。

5) 社会体験③ コーヒー焙煎プロジェクトとぐうぐうカフェ

最近、しごとづくりの一環で若者達とコーヒー焙煎を始めました。コーヒーの焙煎をえらんだきっかけは、仕事の分業がしやすいことや、1つ1つの作業のプロ

セスにいろいろな人が関わるからです。引きこもっていた人でも自分のペースで、特性をいかしながら参加でき、あんまり対人のスキルも必要ありません。働くことに不安を抱える若者たちが焙煎したというストーリーを含め発信・販売していきたいと思案しています。

また、パン作りが得意だった若者の「やりたい」を実現するために、使われなくなっていた石窯を再稼働させ、ピザづくりをはじめました。この場所を活用することで、朝市などでの若者達の活躍の場が広がりました。ぐうぐうカフェが営業している日曜日に来て頂ければ天然酵母でおいしいピザが食べられると思います。

6) 社会体験④ 若者の力×地域の困りごと → 起業へ

若者たちの地域参加の一つとして「なんでもやったるDAY!」という取り組みがあります。取組みの名前は若者達が付けたもので、はじまりのコンセプトとしては、若者が電球交換、大型ゴミの処分など生活のサポートをする代わりに、夕飯のおかず一品、もしくは500円の対価をくださいという発想から始まっています。

「なんでもやったる」といいながら、あまり仕事をこなす力がない若者達も多く地域の中高年のおっちゃん達にいろいろ教わりながら、高齢者の地域の生活課題を解決していくものです。実際には、遅刻してきたり、若者達が中々集まらないこともあります、なんやかんや一日

働き、夜はみんなで晩御飯を一緒にたべながら、仕事の振り返りの話をします。地域の大人たちも、働かざる者食うべからずという意見の人もいれば、昔は自分たちも同じよう働くことに否定的だったこともあるので大目に見て、参加の場を用意し続けようという意見もあります。結局は、夕食からの参加する若者や大人もおり、ゆるやかな活動をずっと続けています。

この取り組みは、若者を中心ターゲットにしながらも、中高年の大人達もたくさん関わるとい意味で地域にとっても大きな意味をもっています。若者に仕事を教えてくれながら、手伝ってくれるおっ

ちゃん達、ご飯を差し入れしてくれるおばちゃん達がそれぞれ役割をもちながらも取り組みに協力してくれています。

7) 中間就労プログラム

この中間就労プログラムは、地域の事業所や企業さんの協力で作ることに力点をおいています。図7の横軸にある「無償ボラ」、「有償ボラ」、「緊急雇用」、「アルバイト・パートタイム」、「フル勤務」と順番に対価が増えるものが並んでいます。縦軸は各地域内にもともとあった活動や新しいプログラム、事業所からの仕事委託、一般就労としての仕事が並んでいます。

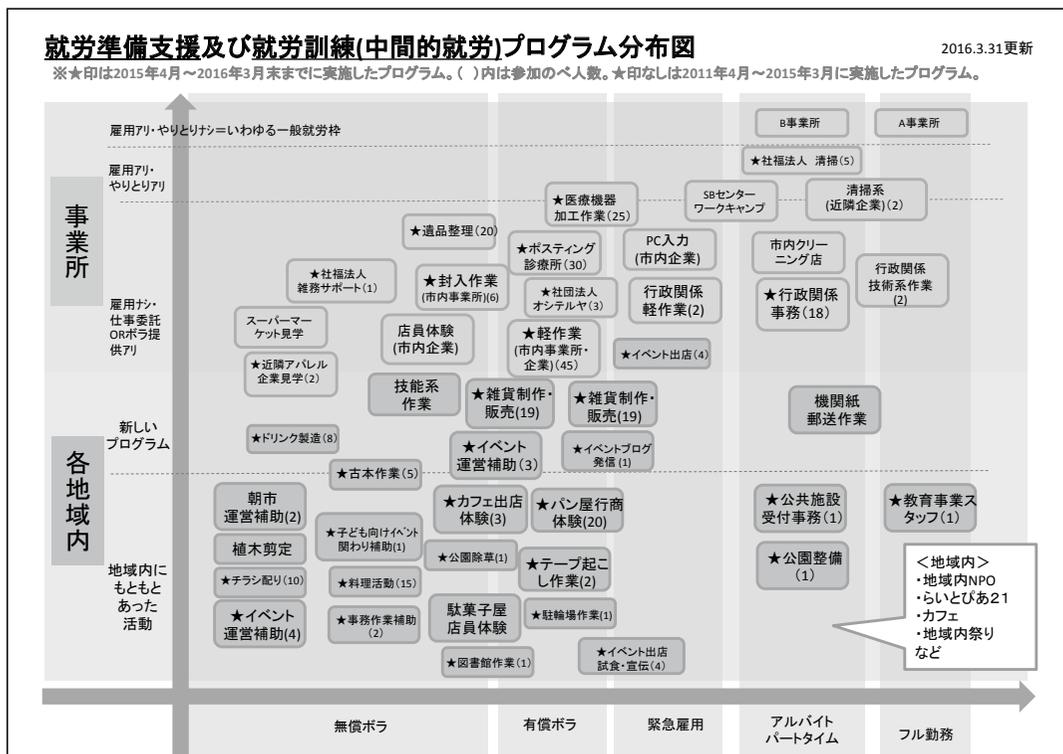


図7 就労準備支援及び就労訓練(中間的就労)プログラム分布図

とくに、地域における仕事のメニューが多い理由は、ここ数年地域をベースにした様々な活動が生まれているためです。また地域の活動での若者の受入れを中心にしながらも民間事業者への開拓にも取り組んできました。これは、就労困難者への中間就労プログラムづくとしてだけでなく、高齢者や障がい者の仕事づくりも含めて働きやすい仕事が充実した地域づくりを目指していく必要を感じています。

7 誰もが安心して暮らせるまちづくり

1) 支える側から共に支え合う関係性へ

私たちが困窮者支援で目指すものは支援と被支援という関係性を越えた関わりをつくることです。もちろん、はじめはアウトリーチで自宅訪問し、支援員として本人や家族と関わりながら信頼関係を築いていくことが前提にあります。最終的に固定化された関係を越えて地域の中で役割をもつことによってエンパワーされることを目標にしています。

例えば、社会体験の取組みの1つである「なんでもやったるDAY!」では、普段は相談員のスタッフが若者の悩みを支えています。相談員の中には力仕事などに向かない人もいます。そのため、イベント当日は相談員より若者の方が力を発揮するのです。ようするに、面談などを通じた相談という関係だけでなく、互いの得意不得意を補いながら自分達の活

動や地域づくりを通して協働していく、このことが困窮者支援の中でもポイントになっていると思っています。

2) 地域で生きづらさを感じている若者を通して地域社会の現状を知る

もう一つは、地域で生きづらさを感じている若者を通して地域社会の現状を知ることです。若者たちの当事者研究「ヒバ子のつどい」を通してつくった「若者の生きづらさを小さな声で絶叫するマガジン」には、多くの若者達の本音が記載されています。

こうした若者たちの声を発信して、企業や関係機関の人達に、一般的な若者のイメージではなく、若者と関わる人たちにも自分たちの若いころの悩みや苦労と重ねたり、今の時代特有の生きづらさへの想像力を持ってもらえればと思っています。こういった社会的弱者の声に耳を傾けたり、想像力をもつ人が増えることで、地域が豊かになっていくと考えています。

困窮者や弱い立場にいる人のための取組みをつくることで、実は周辺にいる人たちにとっても同じように居場所を生み出したり、次の活動につながっていくことがあるのです。

ここには、わずらわしい要素がたくさんあります。家庭の事情で親との関係についてとても悩んでいる若者をご飯を食べに来たら、酔っぱらった地域のおっちゃんに絡まれることもあります。そう

したことを含めて、支援者だけではできない多様な人との交流を通して若者たちは様々な経験を積み上げていきます。

私自身のことでいえば中学一年生の時に父親を亡くしていますが、地域の中で父親世代の人達が沢山関わってくれたことが自分にとってプラスになったこともあります。また、この間スタッフとして働きだした20代の若者は、10代の頃進路を決める大事なテストの日にベッドの中から出ることができず、私が相談員として家に迎えに行くような関係でした。そんな彼が今年から子どもや若者と関わる仕事に加わりました。このように地域に支えられた子どもや若者たちの循環が地域で起こっています。

「地域を必要とした若者は、地域が必要とする若者になる」という韓国の支援者の言葉があります。このことばは韓国との若者支援や地域づくりの交流で教えてもらったものですが、私たち支援者や地域の人たちが関わりを必要とした若者たちは、ゆくゆく育っていった時に地域が必要とする人材になるという意味です。

3) 若者の「生きづらい」を地域づくりに活かす

3番目には、社会・地域が若者の生きづらさをつくったと言われますが、それを逆転させて生きづらい若者が社会や地域をつくるという実践を私たちはつくっていきたいと考えています。

一概に若者支援と言っても、団体の特

色や個性もあり支援の方法は多様にあります。キャリア形成に力を注ぎ、若者たちが労働市場に参入することをサポートする団体もあれば、不登校や引きこもりの若者たちが生きやすい理想的な社会や地域づくりを目指す団体もあります。

私たちの団体が目指す若者支援については、地域というフィールドを活用して、お金はたくさんなくても若者たちが豊かに暮らせることを目指しています。生活のための収入を小商いや中間就労、地域通貨などで稼ぎながら、家賃など生活に最低限必要なものを払い、お金がかからない余暇活動を地域でつくり、ご飯は近所の人に食べさせて貰うことができるような豊かな地域になればと考えています。新たな制度をつくったり、社会に大きなインパクトを与えることよりも、小さなモデルをつくるのが私たちの若者支援の一つの目的ではないかと思っています。

以前にお伺いした長久手市長さんの言葉をかりれば「煩わしさを豊かに」ということです。煩わしさを取り戻すことが地域づくりにつながっていきます。地域での活動は、関われば関わるほど一筋縄ではいかない人間関係や軋轢もあり煩わしい部分もあります。文句を言うことで参加する人、日々発言が変わる人もいます。ただしこのような地域の煩わしさが人や風土を耕し、地域や若者を豊かに育てていくのではないかと実践の中で感じています。



おわりに

私たちが暮らしているまちには、生きづらさを抱え、地域で生活していくことに苦勞した人たちがたくさんおり、多くの社会・地域課題が存在しています。これらの課題に対して、「であい・つながり・げんき」をコンセプトに活動を展開してきました。社会的孤立という課題に対しては出会いの場をつくり、社会的排除にたいしては「つながり」をつくり困難を抱えた人たちを包摂するような社会・地域をつくりたいと思っています。さらに、失業・貧困によって仕事の無い人たちに関してはコミュニティビジネス、仕事づくりを通して役割を持ってもらい、元気になってもらいたいと考えています。こうした地域づくりを目指して実践を続けていきたいと思ひます。本日は貴重な場を用意していただき、ありがとうございました。

.....
 <プロフィール> なかむら ゆうすけ

NPO法人 暮らしづくりネットワーク
 北芝 職員

1986年大阪府生まれ。大学在籍中バックパッカースタイルで26ヶ国を放浪。以降「衣食住」や開発に関わる仕事に関わりたと思うようになり2011年入職。その後、地域づくりや教育事業、東日本大震災の復興支援活動に従事した後、若者支援事業部門を立ち上げ現在に至る。

好きなこと：古道具集め、生地の発酵

苦手なこと：メ切、信号待ち

連絡先：らいとぴあ21(萱野中央人権文化センター)

〒562-0014 大阪府箕面市萱野1-19-4

TEL：072-722-7400

FAX：072724-9698

法人HP：http://www.kitashiba.org/

発信中！

- 暮らしづくりネットワーク北芝WEBサイト
<http://www.kitashiba.org>
- 北芝このごろの話題
<http://kurashinet.blog110.fc2.com/>
- 暮らしづくりネットワーク北芝
<https://www.facebook.com/kurashi.kitashiba>
- らいとぴあニュースブログ
<http://raipinews.seesaa.net/>
- こども地域通貨「まーぶ」
<https://www.ma-bu.org/>